

第P章 プログラミング言語 Python

Python は 1990 年に Guido van Rossum により発表された、マルチパラダイム（手続き型 + _____ + _____）・動的型付けのプログラミング言語である。ライブラリー（前もって用意されている関数など）が豊富で、Web アプリケーションのほか、_____ などデータサイエンス分野で広く用いられるため、2010 年代後半から急速に人気が高まってきている。

ここでは C 言語と異なる部分を中心に説明する。

P.1 Python の実行

対話的な処理系は _____ というコマンドで起動できる。対話的な処理系では、プロンプト（通常、>>>）のあとに式を入力すれば、その値を出力する。

```
>>> 1 + 1
2
```

_____ または _____ と入力すれば対話的な処理系を終了する。

また、Python プログラムのファイルを作成して、`python ファイル名` というコマンドで直接実行することもできる。例えば、`factorial.py` というファイルを次のような内容で作成すると、

ファイル名 `factorial.py`

```
1 def fact(n):
2     if n == 0:
3         return 1
4     else:
5         return n * fact(n - 1)
6
7 if __name__ == '__main__':
8     print(fact(20))
```

シェルから、次のように実行できる。

```
> python factorial.py
```

（「>」はシェルのプロンプト）

Python を実行する環境として、IDLE（Python をインストールしていれば `idle` というコマンドで起動する）、PyCharm、Spyder などいくつかの統合開発環境（Integrated Development Environment, IDE）や Jupyter Notebook というアプリケーションもよく使われるが、ここでは説明を割愛する。

P.2 代入と関数定義

変数と代入

変数は、次のように記号「 」の左辺に書き、右辺の値を代入する。（変数の宣言は特になく、初めて使う変数に代入したときに変数が用意される。このため、綴りの間違いには気を付ける必要がある。）

```
>>> x = 2
>>> x * 3
6
```

関数呼出し

関数とはプログラムの部品であり、特定の処理をまとめて名前だけで利用できるようにしたものである。Pythonでは例えば `print` も関数であり、これは指定した内容を標準出力に表示する関数である。もちろん `abs`（絶対値）、`pow`（べき乗）、`round`（四捨五入）などの数学関数も利用できる。関数を利用するときは、関数名のあとに丸括弧「`()`」で囲んで引数（ひきすう）を指定する。引数が複数ある場合は、コンマ「`,`」で区切る。引数がない場合は、丸括弧だけを書く。

関数定義

関数はキーワード `def` により定義することができる。

```
>>> def fact(n):
...     if n == 0:
...         return 1
...     else:
...         return n * fact(n - 1)
...
>>> fact(10)
3628800
```

`if`～`else`は後で詳しく説明するが、条件判断の形である。「`==`」は両辺が等しいかどうかを判定する演算子である。（「`=`」は変数への代入を意味するので、異なる演算子を使用する必要がある。Pythonに限らず他の言語でも「`=`」は代入を意味し、「`==`」は等価比較を意味する言語が多い。）入力が完了していないと判断するとPython処理系は、上のように第2プロンプト「`...`」を表示して入力の継続を促す。

関数定義は、キーワード `def` のあとに関数名（この例では `fact`）、丸括弧「`()`」の中の仮引数のコンマ区切りの並び（この例では `n` のみ）、コロンの「`:`」で始まる。改行後に関数の本体を記述する。

関数の本体はインデント（字下げ）する。つまり `def` の位置よりも数文字（この例では4文字）分下げる。インデントしている限り関数の本体が続いていると見なされる。

このようにPythonはインデントーションが文法上 言語である。（一方、CやJavaなどの言語ではどのようにインデントしてもプログラムの意味は 。）

`return` の意味は（C 言語などと同じで）あとに書かれた式を評価し、それを戻り値として関数呼出しから抜け出す。あとに式がなければ `None` という値が戻り値になる。

キーワード引数

Python では実引数を渡すときに、位置によって仮引数と対応させるだけではなく、仮引数の名前を指定して実引数を渡すこともできる。これをキーワード引数と言う。例えば次のように定義された関数 `foo` があるとする。

```
def foo(x, y, z):  
    return 2 * x + 3 * y + 5 * z
```

この関数を呼び出すときに、`foo(1, 2, 3)` のように位置で指定することもでき、`x` に 1, `y` に 2, `z` に 3 が代入されて、`foo` が実行され戻り値が 23 になるが、`foo(z=4, x=5, y=6)` のように仮引数の名前を指定して呼び出すこともできる。このときは当然 `x` に 5, `y` に 6, `z` に 4 が代入されて、`foo` が実行され、戻り値が 48 になる。

Q P.2.1 `foo(y=3, z=1, x=4)` の値は?

答:

デフォルト引数

Python は関数を定義するときに仮引数にデフォルトの値を与えることができる。これをデフォルト引数と言う。例えば次のように定義された関数 `bar` があるとする。

```
def bar(x, y=2, z=3):  
    return 7 * x + 11 * y + 13 * z
```

この関数を呼び出すときに、`bar(1, 1, 1)` とすると、`x` に 1, `y` に 1, `z` に 1 が代入されて、`bar` が実行され戻り値が 31 になる。一方 `bar(3)` と呼び出すと、`x` に 3, `y` に 2, `z` に 3 が代入されて、`bar` が実行され戻り値が 82 になる。

Q P.2.2 `bar(2, 3)` の値は?

答:

インポート文

通常は、ファイルに関数などの定義を記述して、`import` 文で読み込む。また Python のソースファイルには `__` という拡張子をつけるのが通例である。

ファイル名 `factorial.py`

```
1 def fact(n):  
2     if n == 0:  
3         return 1  
4     else:
```

```
5         return n * fact(n - 1)
```

```
>>> from factorial import *
>>> fact(20)
2432902008176640000
```

この `from ~ import *` という形式の `import` 文は、`~` というモジュール（ファイル名から拡張子 `.py` を除いたもの）から変数や関数などの定義を読み込むことを意味する。

一方、`import ~` という形の `import` 文もある。これは `~` というモジュールを読み込むが、この形の `import` 文で読み込んだ関数や変数を使うときは、モジュール名+「`.`」を接頭辞として付ける必要がある。別の言い方をすると「`.`」演算子は複合的なものから構成要素を取り出すための演算子である。例えば、次のように書く。

```
import factorial
print(factorial.fact(5))
```

このように書くと、同じ名前の関数や変数が他のモジュールにあっても区別できる。

このほかに `as` というキーワードを使って、モジュール名や関数名に別名をつけるやり方もあるが、実例が出てきたときに詳しく説明する。

P.3 数と文字列

数値リテラル

整数や浮動小数点数のリテラルは他の言語と大きな違いはない。また、接尾辞 `j` を整数や浮動小数点数リテラルにつけることで `_____` を表すことができる。

```
>>> (1 + 1j) / (1 - 2j)
(-0.2+0.6j)
```

Q P.3.1 $(1+i)/(1-i)$ を求めよ。

答:

```
>>> _____
```

文字列リテラル

文字列型は Python ではテキストシーケンス型と呼ばれる。文字列リテラルは、二重引用符「`"`」または一重引用符「`'`」で囲まれた文字列である。一方 Python に文字リテラルは存在しない、つまり一文字のみの定数を特別扱いすることはないので、一重引用符／二重引用符どちらを使っても意味は変わらない。

```
>>> "hello"
'hello'
```

```
>>> 'world'
'world'
```

また三連続の二重引用符「`'''`」または一重引用符「`'`」で囲むと改行や一重引用符・二重引用符を含む文字列を表すことができる。

```
>>> """Mike said "Hello!"
... and Anne said "Good Bye!"
... """
'Mike said "Hello!"\nand Anne said "Good Bye!"\n'
```

引用符の前に接頭辞 `_` または `F` をつけると、波括弧「`{}`」～「`}`」に囲まれた部分が式として評価され、文字列中に埋め込まれる。これをフォーマット済文字列リテラル、あるいは **f 文字列** という。

```
>>> x = 13
>>> f"The factorial of {x} is {fact(x)}."
'The factorial of 13 is 6227020800.'
```

問 P3.2 では、f 文字列のなかに波括弧（「`{}`」または「`}`」）を含めたいときはどうすれば良いか調べよ。

文字列は「`+`」演算子で接続することができ、「`*`」演算子で自身を繰り返し接続することができる。

```
>>> "hello, " + 'world'
'hello, world'
>>> "hey!" * 3
'hey!hey!hey!'
```

str 関数

`str` という関数を使うと他のデータ型の値を文字列に変換することができる。例えば `str(123)` は文字列 `'123'` を返す。また、`str(3.1415)` は文字列 `'3.1415'` を返す。

[]による文字の取出し

文字列から角括弧 `[ ~ ]` で個々の文字を取り出すことができる。例えば、次のように書く。

```
>>> s = "Takamatsu"
>>> s[0]
'T'
>>> s[4]
'm'
```

このように、文字列の各文字は添字 (index) で指定することができる。添字は 0 から始まる位置を表す整数である。0 から始まることを強調するためにオフセット (offset) と言うこともある。また、添字は負の値を指定することもできる。負の添字は、文字列の末尾からの位置を表す。例えば、次のように書く。

```
>>> s[-1]
'u'
```

```
>>> s[-3]
't'
```

なお、Python には一文字のためのデータ型（C や Java の `char` のような型）は存在しないので、文字列の一文字も要素数が 1 の文字列型である。（文字コードではない。）

⚡ スライス

角括弧のなかにコロン「:」を使って範囲を指定すると、文字列の一部を取り出すことができる。これをスライスと呼ぶ。例えば、次のように書く。

```
>>> s = "Takamatsu"
>>> s[1:4]
'aka'
>>> s[4:7]
'mat'
>>> s[:4]
'Taka'
>>> s[5:]
'atsu'
```

1:4 のように書くと、オフセット 1 から 3 までの文字を取り出す。つまり、左端の添字は含まれ、右端の添字は含まれない。コロンの左側、右側を省略すると、それぞれ文字列の先頭から、末尾まで、を表す。また両側を省略して `s[:]` と書くと、元の文字列と同じ内容だが、元の文字列のコピーを返す。

⚡ さまざまな文字列の関数

Python には文字列に対する様々な関数が組み込みで用意されている。例えば次のような関数はよく使われる。

関数	説明
<code>len(s)</code>	文字列 <i>s</i> の長さ（文字数）を返す。
<code>s.split(sep)</code>	文字列 <i>s</i> を区切り文字 <i>sep</i> で分割し、リストを返す。
<code>s.strip()</code>	文字列 <i>s</i> の先頭と末尾の空白文字を取り除いた新しい文字列を返す。
<code>s.startswith(pre)</code>	文字列 <i>s</i> が指定した接頭辞 <i>pre</i> で始まるかどうか、真偽値を返す。
<code>s.endswith(suf)</code>	文字列 <i>s</i> が指定した接尾辞 <i>suf</i> で終わるかどうか、真偽値を返す。
<code>s.find(sub)</code>	文字列 <i>s</i> の中に部分文字列 <i>sub</i> が最初に現れるオフセットを返す。見つからない場合は -1 を返す。
<code>s.replace(old, new)</code>	文字列 <i>s</i> の中の部分文字列 <i>old</i> を <i>new</i> に置き換えた新しい文字列を返す。

この「.」演算子は、一般にオブジェクトから属性（この場合はメソッド）を取り出すための演算子である。つまり文字列型のオブジェクトは `split`, `strip` などのいくつかのメソッドを持っている。

その他の標準的な文字列に関する関数は、Python 標準ライブラリーのドキュメントの組み込み型を探せば見つけることができる。

P.4 演算子と組み込み関数

算術演算子

演算子は C や Java の演算子と似ているが、「/」は整数同士の演算でも通常の（小数になる可能性のある）除算である。整数としての除算の商を求めるには「__」を用いる。余りを求める演算子は「%」である。

```
>>> 1 / 3
0.3333333333333333
>>> 17 // 6
2
>>> 17 % 6
5
```

「**」は__を求める演算子である。

```
>>> 2 ** 10
1024
>>> 2 ** 0.5
1.4142135623730951
```

なお、Python にも += のような複合代入演算子がある。例えば `x += 10` は、`x = x + 10` と同じ意味である。ただし、C や Java にはある ++、-- などの演算子はない。

print 関数と input 関数

画面に出力するには `print` 関数を用いる。いくつかの引数をコンマで区切って与えるとそれらを順に出力する。

```
>>> x = 13
>>> print(x, "+", y, "=", x + y)
13 + 23 = 36
```

最後に、`sep=` とキーワード引数を指定すると、区切り文字を～に変えることができる。（区切り文字を何も指定しないと上の例のように空白文字が区切りに使われる。）

```
>>> print(x, "+", y, "=", x + y, sep=',')
13,+,23,=,36
```

一方、`input` 関数はキーボードから文字列を読みこむ関数である。__関数（整数への変換）や__関数（浮動小数点数への変換）と組み合わせることで、文字列をそれぞれ整数や浮動小数点数に変換することができる。

ファイル名 temp.py

```
1 x = float(input('x を入力してください: '))
2 y = float(input('y を入力してください: '))
```

```
3 z = int(input('z を入力してください: '))
4 age = int(input('年齢を入力してください: '))
```

なお int 関数を浮動小数点数に適用すると切り捨てになる。

```
>>> int(1.5)
1
>>> int(-2.4)
-2
```

また round という関数は四捨五入に近い動作をするが、厳密に言うと、偶数丸め（銀行家の丸め、bankers' rounding）という動作になる。つまり、.5 は最も近い偶数に丸める。

```
>>> round(3.14)
3
>>> round(4.9)
5
>>> round(7.5)
8
>>> round(4.5)
4
```

（そんなことが実際あるかどうかはさておき）本当の四捨五入が必要な場合は Python の標準ライブラリーの decimal モジュールを使えば可能である（が、ちょっと面倒である）。

P.5 制御構造

if 文

条件分岐を表す if 文は if というキーワードのあと、条件式、コロン「:」で始まり、改行後に条件が成り立つときに実行する文を並べて書く。

```
1 if x < 0:
2     print('x は負の数です。')
3     print('正の数や 0 ではありません。')
```

条件式には「<」「<=」「>=」「>」「==」「!=」などの比較演算子を用いることができる。条件が成り立つときに実行する文はインデント（字下げ）する。つまり if の位置よりも数文字（この例では 4 文字）分開始を下げる。字下げは首尾一貫していれば何文字でも良いが 1 文字では少なすぎる。ここに複数の文を並べることもできる。同じ字下げ幅である限りは、条件が成り立つときには実行する。

条件が成り立たないときに実行する文は、キーワード `else`、コロン「:」のあとに改行して書く。

```
1 if y < 0:
2     print('y は負の数です。')
3     print('正の数や 0 ではありません。')
4 else:
5     print('y は正の数または 0 です。')
```

```
6 print('負の数ではありません。')
```

また、if と else の間に `elif` というキーワード、条件式、コロン「:」で始まり、改行後にインデントした文の並び、というかたちをはさむことができる。この場合、上から順に条件式を評価し、成り立つときに対応する文の並びを実行する。

```
1 if z <= 0:
2     print('z は負の数か 0 です。')
3 elif z < 10:
4     print('z は一桁の正の数です。')
5 elif z < 100:
6     print('z は二桁の正の数です。')
7 else:
8     print('z は三桁以上の正の数です。')
```

論理演算子

条件式は `and` (～かつ～)、`or` (～または～)、`not` (～でない) などの論理演算子で組み合わせることができる。

```
1 if 13 <= age and age <= 19:
2     print('あなたはティーンエイジャーです。')
```

Python では (C や Java と異なり) 比較演算子は連鎖させることができる。つまり、この例は次のように書くこともできる。

```
1 # x < y < z は x < y and y < z と同じ。
2 # ただし、前者では y は一度しか評価されない。
3 if 13 <= age <= 19:
4     print('あなたはティーンエイジャーです。')
```

コメント

上の例で使われているように、「`#`」から行末まではコメントである。

なお、関数定義の中で、最初に説明のために文字列リテラルを記述することがある。実行結果には影響しないのでコメントのようなものであるが、正確には関数のドキュメンテーション文字列 (docstring) と呼ばれる。

```
1 def fact(n):
2     """n の階乗を求める関数。
3     n は 0 以上である必要がある。
4     """
5     if n == 0:
6         return 1
7     else:
8         return n * fact(n - 1)
```

for 文

決まった回数の繰り返しを実現するときには for 文が使われる。次のようにキーワード for、変数、キーワード in、式、コロン「:」という形式で使われる。このあとに改行して、繰り返し本体をインデントして書く。

ファイル名 temp2.py

```
1 for i in range(5):
2     print('Hello')
3     print(' ', i, '回目')
```

ここで range 関数は、range(n) が、0 から n-1 までの整数の列を返すような関数である。

これを実行すると、変数 i に 0, 1, ..., 4 が順に代入され、次のように出力される。

```
Hello
 0 回目
Hello
 1 回目
Hello
 2 回目
Hello
 3 回目
Hello
 4 回目
```

他に range 関数は次のようなカタチでも使われる。

range(n)	0, 1, ..., n-1 を返す
range(m, n)	を返す
range(m, n, s)	を返す

ただし、k は $m + k \cdot s$ が n 未満となるような最大の k である。

Q P.5.1 次のプログラムの断片はそれぞれどう出力するか？なお、print 関数のキーワード引数 end= は、出力の最後に出力する文字を指定するものである。これを省略すると、最後に改行文字が出力される。また end='' とすると、出力のあとに何も追加しない。

```
1. for i in range(3):
    print(i, end=', ')
```

```
2. for i in range(3, 6):
    print(i, end=', ')
```

```
3. for i in range(2, 8, 3):
```

```
print(i, end=', ')
```

なお range 関数の返す値は後述のリストではないが、list 関数でリストに変換することができる。

```
>>> range(2, 5)
range(2, 5)
>>> list(range(2, 5))
[2, 3, 4]
```

while 文

繰り返しを表す while 文は while というキーワードのあと、条件式、コロン「:」で始まり、改行後に繰り返す文をインデントして並べて書く。

ファイル名 while.py

```
1 n = 1000
2 while n > 0:
3     print(n, end=', ')
4     n = n // 2    # n //= 2 と書いてもよい
5 print()          # 改行のみ出力する
```

これを実行すると、次のように出力される。（なお、繰り返しの条件を間違えると、無限ループになってしまい、出力が止まらなくなるときがある。その場合は Ctrl + C で中断することができる。）

```
1000, 500, 250, 125, 62, 31, 15, 7, 3, 1,
```

なお、C や Java の do～while 文に相当する（ループ本体を条件式より先に実行する）構文は Python にはない。

continue 文と break 文

Python にも continue 文と break 文がある。意味は C や Java のそれと同じである。つまり、while 文や for 文の中で、_____ 文を使うと、その文の後の処理を飛ばして、次の繰り返しの先頭に戻る。また、_____ 文を使うと、繰り返しを中断して繰り返しの外に出る。

⚡ while ～ else 文、for ～ else 文

Python では、while 文や for 文で、繰り返しが正常に終了した場合（つまり break 文で中断しなかった場合）ループのあとに実行される文を else 節として書くことができる。

ファイル名 forelse.py

```
1 for i in range(3):
2     print(i, end=', ')
3     if (input('コンティニュー? (y/n) ') != 'y'):
4         break
```

```

5 else:
6     print('繰り返しが正常に終了しました。')

```

この例では、「コンティニュー？」に対して y 以外を入力すると、繰り返しが中断され、その場合は else 節の内容である「繰り返しが正常に終了しました。」の出力はされない。

⚡ try 文

Python には例外処理を行うための try 文がある。**例外** (exception) というのは、初期化されていない変数を使った、0 で割り算した、存在しないファイルをオープンしようとした、などの、正常でない状況である。例外が発生すると何もしなければプログラムが終了してしまうが、try 文を使うことで例外が発生しても、プログラムを終了させずに処理を続けることができる。

try 文は次の例のように使われる。

ファイル名 `tryexample.py`

```

1  str = "xy"
2  for i in range(-2, 3):
3      try:
4          print(1 / i, end=', ')
5          print(str[i], end=', ')
6      except ZeroDivisionError:
7          print('ゼロ除算エラーが発生 ', end='')
8      except IndexError:
9          print('インデックスエラーが発生 ', end='')
10     else:
11         print("... ", end='')
12     finally:
13         print("end")

```

一般的には try というキーワードのあとのコロンの「:」で始まり、改行後に例外が発生するかもしれない文をインデントして並べて書く。そのあと except というキーワードを書き、例外の種類のアとに、コロンの「:」の行のあとに改行して、例外が発生したときの処理をインデントして並べて書く。この except 節は複数個書くこともでき、その場合は、発生した例外の種類に対応する except 節が実行される。

またオプションの else: を使うと、例外が発生しなかった場合に実行する文をインデントして並べて書くことができる。最後にやはりオプションの finally: を使うと、例外が発生してもしなくても最後に実行する文をインデントして並べて書くことができる。

結局、上のプログラムは次のように出力する。

```

-0.5, x, ... end
-1.0, y, ... end
ゼロ除算エラーが発生 end
1.0, y, ... end
0.5, インデックスエラーが発生 end

```

よく使われる例外の種類としては次のようなものがある。

例外の種類	説明
ZeroDivisionError	0 で割り算をしたとき
IndexError	リストや文字列のインデックスが範囲外のとき
FileNotFoundError	存在しないファイルをオープンしようとしたとき
ValueError	int などの関数に不正な値を渡したとき
NameError	存在しない変数を参照したとき

例外を意図的に発生させるには、raise 文を使うが、ここでは説明を割愛する。

P.6 リスト

リストは単純だが有用性の高いデータ型で、関数型言語などでも多用されるデータ型である。配列と同様に（同種の）データを順序付けて集めたものだが、要素の追加・削除が可能である。ただし、配列のように各要素に等時間で高速にアクセスすることはできない。

リストリテラル

リストを構成するためには、_____（[〜]）で囲み、各要素をコンマ「,」で区切って並べる。例えば、[] は空リストを表し、[2, 3, 5] は3つの要素からなるリストを表す。

また、リストは「+」演算子や「+=」演算子で接続することができる。

```
>>> w = [1, 3] + [0]
>>> w += [6, 2, 3]
>>> w
[1, 3, 0, 6, 2, 3]
```

「*」演算子や「*=」で、自身を繰り返し接続することもできる。

```
>>> v = [0]
>>> v * 5
[0, 0, 0, 0, 0]
>>> u = [1, 2, 3]
>>> u *= 3
>>> u
[1, 2, 3, 1, 2, 3, 1, 2, 3]
```

リストに関する関数

list という関数はいろいろなものをリストに変換することができる。range 関数の結果をリストに変換できることは既に述べた。そのほか、文字列やタプル（後述）などもリストに変換することができる。例えば、list('abc') は ['a', 'b', 'c'] というリストになる。

リストに関しても文字列と同様に、さまざまな操作を行うためのメソッドが用意されている。以下はそのごく一部である。

メソッド	説明
len(list)	リスト list の要素数を返す
list.append(item)	リスト list の末尾に item を追加する

メソッド	説明
<code>list.sort()</code>	リスト <code>list</code> の要素を昇順にソートする
<code>list.pop()</code>	リスト <code>list</code> の末尾の要素を削除し、その値を返す

実は `n` 番目の要素 `list[n]` やスライス `list[2:5]` などの記法も文字列と共通である。

リスト内包表記

リスト内包表記 (list comprehension) は数学で使われる集合の表記に似た糖衣構文 (syntax sugar) である。

```
>>> [x * y for x in range(1, 5) for y in range(5, 8)]
[5, 6, 7, 10, 12, 14, 15, 18, 21, 20, 24, 28]
>>> [x * x for x in range(1,11) if x % 2 == 1]
[1, 9, 25, 49, 81]
```

リスト内包表記は、角括弧 (`[~]`) のなかに最初に式を一つ書き、そのあとに、「`for 変数 in 式`」というカタチか「`if 式`」というカタチを並べたものである。(ただし並びの最初は「`for ~`」のカタチでなければいけない。) その値は「`for 変数 in 式`」というカタチで与えられた繰り返しの中で「`if 式`」というカタチで与えられた条件が成り立つときの、角括弧のあとの最初の式の値を順に並べたものになる。

Q P.6.1 次のリスト内包表記の値は何か?

① `[x * y for x in [1,2] for y in [3,5,7]]`

P.7 タプル

タプル (tuple, 組) は要素を「`,`」(コンマ) で区切って並べ、丸括弧「`(`」と「`)`」で囲んで表す。(文脈によっては丸括弧がなくても良い場合がある。) リストは通常、各要素は同種のものからなるが、タプルは要素の種類が同一である必要はない。

タプルは以下の例のように関数の戻り値に使うこともできるし、代入文の左辺に書くこともできる。

ファイル名 `temp3.py`

```
1 def sort2(m, n):
2     if m > n:
3         return (m, n)
4     else:
5         return (n, m)
6
7 i1 = int(input('整数 1 を入力してください: '))
8 i2 = int(input('整数 2 を入力してください: '))
9
10 (j1, j2) = sort2(i1, i2)
```

```
11 print('大きいほうは', j1, '小さいほうは', j2, 'です。')
```

特に次のように書くと左辺の 2 つの変数への代入が同時に行われるので、2 つの変数の内容を入れ替えることができる。

```
y, x = x, y
```

(この例ではタプルのまわりの丸括弧が省略されている。)

Q P.7.1 次のリスト内包表記の値は何か?

① `[(x, y) for x in [1,4,7] for y in [2,5,8] if x < y]`

問 P.7.2 3 つの実数 a, b, c を受け取り、二次方程式 $ax^2 + bx + c = 0$ の 2 つの解を組として返す関数 `quadratic` を定義せよ。

標準ライブラリー関数の `zip` は 2 つ以上のイテラブルの同じ位置の要素をタプルにしたもののイテラブルを返す関数である。イテラブルの長さが異なる場合は、短いほうにあわせる。(イテラブル (iterable) は、いくつかの要素を列挙したデータと考えておけば良い。リストもイテラブルの一種である。)

```
>>> list(zip([1,3,5,7,11], [2,4,6,10]))  
[(1, 2), (3, 4), (5, 6), (7, 10)]
```

⚡ 可変長引数

Python では、引数の数が決まって入らない関数を定義することができる。具体的には、関数を定義するときに最後の仮引数の前にアスタリスク「*」をつけると、この仮引数は余ったすべての引数を受け取ったタプルになる。例えば、次のように関数の定義を開始することができる。

```
def varargs_func(x, y, *args):  
    :
```

この関数を例えば `varargs_func(2, 3, 5, 7, 11)` のように呼び出すと、`x` の値が 2、`y` の値が 3、`args` の値が `(5, 7, 11)` となる。

また、最後の仮引数の前にダブルアスタリスク「**」をつける形もあり、これは余ったキーワード引数を、後述の辞書型としてまとめて受け取ることができる。詳しい説明は割愛する。

P.8 ⚡ 辞書型

Python には、キーと値のペアを保持するための組み込みのデータ型として、辞書 (dictionary) 型がある。他の言語ではハッシュマップや連想配列と呼ばれるものに相当する。配列やリストは、個々の要素をアクセスするときに整数の添字 (オフセット) を使うが、辞書型はより一般的なキーを使って要素にアクセスする。キーにはいろいろな型を使うことができるが、一般的には文字列や整数が使われる。

Python の辞書型は波括弧 (`{ ~ }`) のなかにキーと値のペアをカンマ区切りで並べることで表現される。キーと値のペアはコロン `:` で区切る。例えば `{'x': 1, 'y': 3.2, 'foo': -2.9}` は `'x'` という文字列のキーに対して 1 という値、`'y'` に対して 3.2 という値、`'foo'` に対して -2.9 という値を関連付けた辞書を表す。

辞書に対しては、リストや文字列と同じように 角括弧 `[ ~ ]` を使って要素にアクセスする。また、要素を削除するには `del` 文を用いる。

ファイル名 `dictexample.py`

```
1 colors = {
2     'red':    0xff0000,
3     'green':  0x00ff00,
4     'blue':   0x0000ff,
5     'salmon': 0xfa8072,
6 }
7
8 print(f'0x{colors['red']:06x}')
9 print(f'0x{colors['green']:06x}')
10 print(f'0x{colors['blue']:06x}')
11
12 colors['yellow'] = 0xffff00
13 print(f'0x{colors['yellow']:06x}')
14 del colors['salmon']
15 print(f'0x{colors['salmon']:06x}')
16 # print(f'0x{colors.get('salmon', 0):06x}')
```

この例では f 文字列のなかで `{num:06x}` という形を用いているが、この `:`以降はフォーマット指定子と言って、`:06x` は値を 16 進数で表し、ゼロ埋めして 6 桁の文字列にすることを意味する。このプログラムは `0xff0000`, `0x00ff00`, `0x0000ff`, `0xffff00` と順に出力し、15 行目で `colors['salmon']` がいないので `KeyError` という例外が発生する。キーが存在しない場合に例外を発生させずにデフォルト値を返すには、`colors.get('salmon', 0)` のように `get` というメソッドを使うことができる。`get` の第 2 引数がデフォルト値である。上のプログラム例の 15 行目の `colors['salmon']` を `colors.get('salmon', 0)` に書き換えると、`0x000000` と出力する。

辞書型の各要素に対する繰り返しを行うためのメソッドも用意されている。例えば、`items` というメソッドは、辞書の各要素をキーと値のペアのタプルとして返すイテラブルを返す。例えば次のように使用する。

```
1 for key, value in colors.items():
2     print(f"{key}: {value}")
```

P.9 ⚡ 高階関数とラムダ式

高階関数は _____ 関数である。

リストに対しては、いくつかの高階関数が標準ライブラリーに用意されている。例えば、`map` は、リストの要素に一斉に関数を適用し、その戻り値のリストを返す関数である。（正確にはイテラブルを受け取って、イテラブルを返す関数である。一般にイテラブルを表示するためには `list` 関数でリストに変換する必要がある。）

このメソッドは次のように使用することができる。

```
>>> list(map(chr, [97, 98, 99, 100]))
['a', 'b', 'c', 'd']
>>> def twice(n):
...     return 2 * n
>>> list(map(twice, [97, 98, 99]))
[194, 196, 198]
```

ここで、`chr` は文字コードに対し対応する一文字からなる文字列を返す関数である。

ところで高階関数の引数として使う `twice` のような小さな関数にいちいち名前をつけるのは面倒なので、名前をつけずに関数を表現する記法が用意されている。これを `lambda` という。（この名前は、かつて数学の一分野で、この目的のためにギリシャ文字の「 λ 」が使われたことに由来する。）

例えば、`lambda x: 2 * x` という式で `twice` と同等の関数を表す。キーワード `lambda` とコロン「:」の間に仮引数のコンマ区切りの並びを、コロンの右側に戻り値の式を書く。次はラムダ式の使用例である。

```
>>> list(map(lambda x: x * x, [2, 3, 5]))
[4, 9, 25]
```

Python の `map` は、2 引数以上の場合にも対応しており、複数のリストを処理することができる。

```
>>> list(map(lambda x, y: x + y, [1, 2, 3], [4, 5, 6]))
[5, 7, 9]
```

また、`filter` は、リストの要素の中で、与えられた関数の値を真にする要素だけのリストを返すメソッドである。

```
>>> list(filter(lambda x: x % 2 == 0, [2, 3, 5, 8]))
[2, 8]
```

他にも便利な高階関数がいくつかあるが、ここでは例として `sorted` と `functools.reduce` を挙げる。`sorted` はリストをソートする関数であるが、`key` 引数を使うと、ソートの基準を指定することができる。

```
>>> sorted([1, 7, 3])
[1, 3, 7]
>>> sorted([('takamatsu', 12.0), ('matsuyama', 15.0),
            ('tokushima', 25.7)], key=lambda x: -x[1])
[('tokushima', 25.7), ('matsuyama', 15.0),
 ('takamatsu', 12.0)]
```

`lambda x: -x[1]` は、タプルの 2 番目の要素を負の値に変換する関数である。つまり、タプルの 2 番目の要素を基準に降順にソートすることを意味する。

また `functools.reduce` は、リストの要素に左から順に 2 引数の関数を適用して 1 つの値にまとめる関数である。

```
>>> from functools import reduce
>>> reduce(lambda x, y: x * 2 + y, [1, 5, 3, 7])
41
```

これは $((1 * 2 + 5) * 2 + 3) * 2 + 7$ の計算結果である。

P.10 ⚡ ジェネレーター

通常関数は、リターンする（戻り値を返す）と、次に実行される時はもう一度関数の最初から実行される。しかし、Python の **ジェネレーター関数** (generator function) は前回に値を渡した地点の **続きから** 実行が再開される。

ファイル名 `fib.py`

```
1 def gfib(n):
2     a = 1
3     b = 1
4     while a < n:
5         yield a
6         a, b = b, a + b
```

Python のジェネレーター関数では `yield` というキーワードを使って値を渡す。`yield` 文は `return` 文と似ていて、`yield 式` という形で用いる。

ジェネレーター関数を呼び出すと、すぐに関数内部のコードが実行されるのではなく、一旦、ジェネレーターイテレーター (generator iterator) というオブジェクトが作られて返される。このジェネレーターイテレーターを `next` 関数に渡すと、ジェネレーター関数内部のコードが実行され、`yield` された値を返す。さらに `next` 関数を呼び出すと `yield` 文の `式` 実行が再開され、やはり、次の `yield` された値を返す。

```
gen = gfib(100)
print(next(gen))      # 1 を出力する
print(next(gen))      # 1 を出力する
print(next(gen))      # 2 を出力する
print(next(gen))      # 3 を出力する
print(next(gen))      # 5 を出力する
print(next(gen))      # 8 を出力する
```

ジェネレーターイテレーターは `for` 文の `in` の次の式としても使うことができる。この場合の `for` 文はジェネレーターイテレーターを受け取った `next` 関数によって返される値を順に変数に代入してループする。ジェネレーター関数の中のコードの実行が `return` 文によりリターンするか、関数を抜けるとループを終了する。

```

1 for v in gfib(20):
2     print(v, end=' ')

```

この部分は「 _____ 」と出力する。

ジェネレーターは必ずしも有限個の要素の生成で終わる必要はない。次の例は無限に yield する例である。

ファイル名 ifib.py

```

1 def ifib():
2     a = 1
3     b = 1
4     while True:
5         yield a
6         a, b = b, a + b

```

次のようにすると、

```

1 for i, v in zip(range(15), ifib()):
2     print(v, end=' ')
3 print()

```

この部分は「1 1 2 3 5 8 13 21 34 55 89 144 233 377 610 」と出力する。

問 P.10.1 整数 n を引数として受け取り、最初は n を yield し、以降は、

- ① 直前に yield した値が偶数ならば $n/2$ を yield する、
- ② 直前に yield した値が奇数ならば $3n + 1$ を yield する、

という処理を繰り返すジェネレーター関数 hailstone を定義せよ。

P.11 ⚡ 例: エラトステネスの篩（ふるい）

最後に、素数列を生成するプログラムを例として挙げる。（ただし、この定義は効率面での改良の余地は大いにあると思われる。）

ファイル名 primes.py

```

1 def ifrom(n):
2     while True:
3         yield n
4         n += 1
5
6 def sieve(n, xs):
7     for i in xs:
8         if i % n != 0:
9             yield i
10
11 def primes():
12     xs = ifrom(2)
13     while True:
14         n = next(xs)
15         yield n

```

```
16 xs = sieve(n, xs)
```

この `primes()` は無限に素数を生成するので、例えば `range` のように有限のものと `zip` する。

```
1 for i, p in zip(range(20), primes()):  
2     print(p, end=' ')
```

この `for` 文は、

```
2 3 5 7 11 13 17 19 23 29 31 37 41 43 47 53 59 61 67 71
```

と 20 個の素数を出力する。